国語科総論

テーマ　「豊かに生きるために」

1　テーマ設定の理由

昨年に引き続き、「豊かに生きるために」必要なことは何なのか、そのことに国語科として貢献できることは何なのかをテーマとして設定した。

我々人間は社会生活を営む動物である。当然、自分以外の人々とコミュニケーションを取り、自分が属する社会の中で自らの居場所を確立していかなければならない。その際もっとも必要なものは自分以外の人に自分の持つ『情報を送る力』、そして他者からの『情報を分析する力』、加えて他者の『思いを受け入れる力』と考えた。そして、これらの三つの力の根底をなすものが言語であることは疑いようのない事実である。つまり、言語は目前にある物事や事態を認識する上でも、考える上でも、その考えを自分以外の対象に送る上でも、また自分以外の人の感情を知る上でも、もっとも根底をなすものと考えたのである。

近年はインターネットや携帯メール・ブログなど相手の顔の見えない情報交換の場が急激に増えてきている。このような情報交換の場では、情報の送り手は自分の世界にのみ目を向け何の相手意識もなく発信していることが多いようである。中には、自分の思いを述べることに終始し、情報交換とは到底呼べないようなものもある。これは『情報を送る力』の不足であり、このことを学ぶということは本校の研究の三つの柱の一つである「個性を拓く」ということになる。

さらに、この傾向は顔を合わせての情報交換にも顕著に見られだした。学校生活においても、互いに自分の言いたいことだけをいい、自分の関心のある話題だけに反応する。同じ空間にいながら、コミュニケーションしているとは言い難い状況もしばしば見受けられる。そしてその中でももっとも問題なのは、本人たちはこのような状況をコミュニケーションしていると思っていることである。加えて技術の進歩に合わせて、個人の考えや情報を個人レベルで無作為に世界にむけて自由に発信できることも、こういった面を加速させている。さらには、諸外国の積極的な発言力を間違った形で受け、発言することだけを素晴らしい行為であるととらえられかねない世間の風潮も加速を手助けしているのではないだろうか。これらは『情報を分析する力』『思いを受け入れる力』の不足である。これらを学ぶことで研究の柱である「社会につなぐ」と「世界に結ぶ」を身につけることが出来る。

さて、上記のような不足している力を手に入れることで、生徒は『情報を送る力』（個性を拓く）『情報を分析する力』『思いを受け入れる力』（社会につなぐ）（世界と結ぶ）という力・・・豊かに生きる力を得ることが出来るようと考えた。そして、本年度は昨年の「成果と課題」から「学習の過程の個人差」(個人の理解の差)を如何に解決するかを課題として考えた。その一方策として生徒各自が教え合い高め合う環境の工夫を設定した。すなわち、協同学習である。協同学習を設定すると、特にお互いの思考・意見を高めるための探究する部分を重視できる・・・すなわち最初に述べた三つの力を学習する環境を生徒に与えやすいと考えた。もちろん教師側の工夫として、豊かな語彙力の獲得とその使用の場を追体験することや、コミュニケーション力の向上、自尊感情につながる自己評価の研究も引き続きより深く行わなければならない。

2　本年度の研究について

①　個性を拓く学び

個性を拓くとは、他者と関わりながら自分なりの考えや表現を作り上げ、自分の学びへと深めていく資質や能力を培うことである。国語科では、語彙力の向上を常に念頭に置くのはもちろんのこと、多く

の文章に接する機会を大切にし、意見を発表する場、さまざまな種類の文章を書く機会を意識的に設定していきたい。また、発表した意見や書いた文章を互いに評価し合う機会を積極的に設定したい。そのような場で他者の意見を聞くこと、他者の評価を受けることを通じて、自らの内なる可能性に気付かせ、自己の学びを深めさせたい。

② 社会につなぐ学び

社会につなぐとは、他者と共通の規範意識を身につけ、周囲の人々と協調しながら社会の一員として生活を送る資質や能力を培うことである。テーマ設定の理由にも述べたように社会の一員として生きるためには自らの考えや状況を他者に正確に伝えなければならない。同時に他者の意思や感情を受け止められることも必要な力である。そのためには生きた言葉を自分ものにしていること、それらを適切に選択することが必要になる。学習場面で様々な思いの詰まった作品に出会い、多くの意見を聞き、考え、表現する場を設定する工夫が必要となろう。さらに生徒自身が自らの居場所を探る力を養う場として、授業内で「作品に出会い、意見を聞き、考え、表現する場」を設定するようにしたい。

③ 世界と結ぶ学び

世界に結ぶとは、国際社会において「自ら成長しながら」他者と「共に生きる」ために必要な基礎的な資質や能力を培うことである。自国の言葉で自分の考えや意思を世界に発信していくこと、自国の文化に対する知識を持つことは、国語科の使命であることは言うまでもない。必修教科の中で積極的に扱うことはもちろん、選択教科の中でも様々な場面（時代背景なども含めて）において異なる国の考えや文化に触れる機会を意識的に設けていきたいと考える。自国の言語、考え、文化を大切にする態度を養い、同時に異なる考え、文化も尊重できる国際人の基礎を育てたい。

≪学びのサイクルについて≫

国語科では、習得サイクルと探究サイクルを次のように考えた。

例えば漢字の学習において、漢字そのものの書き方や書き順・読みなどを学ぶのを習得サイクルと考えると、その漢字を使った熟字訓や四文字熟語、短文作文は探究サイクルと言うことになる。しかし、現実に国語教育では、習得・探究これら全てを含んで基礎的な学習の一部、すなわち習得サイクルと考える。

同じようなことは、文章読解でも言える。たんに文章の意味を理解する（熟字訓やことわざ、慣用句の意味も含めて）ことやその文に隠されたテーマを読みとることは、探究サイクルではなく習得サイクル習得サイクルである。

そして、習得サイクルを重ねて他の文章に学んだことを活用することで高いレベルへと移行していく。それが、以前は読み取りきれなかった文章が読みとれるようになるということである。しかし、その頃にはすでに次の成長段階に応じたレベルの文章へと挑戦するようになるために、身につけている能力はもう一度習得サイクルとして働くようになっていく。（それは、小学校で学ぶことと中学校・高校で学んでいることが系統としては同じことで分かるだろう。）技術がより高度なものへと移行するのではなく、練度が高まるイメージであろう。

このように様々な文章へと対応できるようになるために、ある教材で学ぶ色々な知識や技能或いはその課程、その学んだものを別の教材で活用することを習得サイクルと考えた。

では、国語科における探究サイクルとはどのようなものか。それについては、次のように考えた。

確かに、一般的な国語の授業展開の中では習得サイクルと活用が中心となり、探究サイクルは設定しにくいかもしれない。しかし、教材を元にして、学んだ知識や技術（習得サイクルやその活用）などを

通して得た、高いレベルでの疑問や課題は別である。習得サイクルで学んだことを他の教材に当てはめてみる活用とは違うこと・・・つまり「教材に対して自分の興味を中心としたレポート」や「教材の内容を対象とした様々なディベート」「教材から学んだことを自分なりに確認するレポート」などである。練度の高まった技術や知識を持って、全く新しい自分の考えを模索し構築するイメージである。国語科としては、これを探究サイクルとしてとらえることとした。もちろん、この授業も珍しいものではないだろう。ただ、全体的に時間と手間が掛かるものであり、全ての単元で常に取り入れることは難しいと言える。

以上のように、習得・探究のサイクルを考えて次のようにまとめた。

- 習得サイクル…作品を通して、主に国語科で必要とする基礎的な知識や技術、或いは作品のテーマに近づくために必要な知識や思考を活用するサイクル。
- 探究サイクル…習得サイクルで身につけた知識や技術、派生した自分自身の考えをより深くより新しいものへと高めていくサイクル。

もちろん実際には、習得サイクルの中にも意見交換や発表の場は存在する。しかし、それは定義としての解答やそこへ至る思考手順の交換・発表である。探究サイクルで扱う意見交換や発表の場とは、教材や授業に刺激されて浮き出てきた生徒自身のものを取り扱う場である。

≪協同学習について≫

国語科において、学習サイクルの項で書いたことを実現するためには、互いに意見を交換し合うネットワーク・・・つながり・・・を多く取ることが特に必要である。そのネットワークの一つとして、クラス全体で発表をするのも手段の一つである。しかし、より効果的により深く行き渡らせるためには、マニュアルとして生徒全員が意識を統一できる授業形態が必要である。

そこで従来のクラスという大きなつながりだけではなく、ペアや班という小さなつながりを取り入れることで、より細かな話題を深く話し合える状態を与えることを考えた。細かな単位を作ることで話し合う人間の顔が見える状態が出来、高い学習力を求めていくための話し合いの場となるだろう。

- 習得サイクルにおける協同学習…基礎的な知識や技術を他者とのつながりの中で協力しあうことで、一人で学習しているのではないという気持ちを持たせたい。そんな中に小さなつながりであるペア学習や班学習を取り入れることで、生徒自身の教え合い心と聞き合う心を育て、「知識・技術」の高い理解のためのもの。
- 探究サイクルにおける協同学習…自らの意見や他者の意見を、互いに共有し発表し合うことでより深くより新しいものへと高め、自分の意見や発表方法に足りないものや改良点を追究する気持ちを常に持たせるようもの。

これら協同学習を効果的に授業に取り入れるためには、授業で協同学習に必然性のある場面を設定する必要がある。つまり互いの意見や思考を交換し合うことが当たり前であると思うような授業を習慣づけることが重要である。

3　成果と課題

「個性を拓く学び」という点で、語彙力の向上を念頭に置きつつ、多くの文章に接する機会、意見を発表する場、さまざまな種類の文章を書く機会を意識的に設定するようにしてきたわけであるが、3学年とも機会を設けることはできたと言える。しかし、発表した意見や書いた文章を互いに評価し合う機会の積極的な設定はまだまだ不十分であった。45分7時間授業という新しい形態の中で思い通りに時間配分でき

なかったのも一つの理由であろうが、今後は、時間配分を十二分に意識した授業づくりが必要である。

「社会につなぐ学び」という点では、授業内でいろいろな作品に出会い、意見を聞き、考え、表現する場を設定するように心がけてきた。前述の「個性を開く学び」と重複する部分もあるが、多様な作品に親しませることで、自分たちの属する社会とは違う社会を感じさせようとしたわけである。その点では、どの学年も投げ入れ教材や関連した教材をうまく取り扱えたと考える。ただ、どうしても脱線的な印象を持たれがちなので、いかに投げ入れた教材を生徒の心に印象付けるかが重要である。

「世界と結ぶ学び」という点では、異なる国の考えや文化に触れる機会は漢文や古典、あるいは小説、報告文などでとることができた。しかし、それらに対して日本人として考えて、日本自身として意見を述べるレベルには達しなかった。意見を述べるために・・・つまり異なる文化と自国の文化を比較するためには、こちらが想像している以上に、日本の言語や考えや文化を大切にする態度を養えるだけの文章を用意しなければならないだろう。大きな課題である。

学びのサイクルや協同学習については、まだまだ研究途中である。しかし、生徒の学習の発展状況をつかみ、個に応じた学習形態をクラス内で最善のものを選択するためには、この二つの研究は欠かせないものである。国語は、教科の特性として学びのサイクルが成立しにくいのではないかとも考えていた。しかし、今年の研究でいくつかの光明も見えてきた。たとえば、互いの文章を感想ではなくて、はっきりとした観点の下で評価し合い、記録を残していくなどである。これらの研究は、今後の大きな課題である。

実践1　必修教科1年生

授業者　宮　田　紀　美　子

① 題材　　「説明文を書こう」

② 題材について

子どもたちは、さまざまなメディアから多くの情報を受信している。しかし発信はと言えば「話す」以外にはパソコンや携帯電話によるメールなどでおしゃべりすることが多く、筋の通った文章を考え発信することは非常に少なくなってきている。そのためか授業の発表など他者に何かを伝えようとするときにも、独りよがりな発言になりがちで一所懸命伝えようとするものの理解されなかったり誤解されたりすることも少なくない。また文章を書く経験が少ないため書くことへの抵抗感が強く、いざ文章を書き始めると話し言葉のままの作文になったり、主述のねじれた文になりこれを推敲できなかったり、語句や漢字を正しく使えないなどの問題を抱えている。

今回は説明文を学習し自らも追体験的に説明文を書くことによって筋道だった文章を書く技術を身につけさせたいと考えている。

実生活の中での作文は、備忘のためのメモであったり、人に用件を伝えるためのものであることが多い。また、実生活の中での読解は「読書」を除けば製品の説明書を読む機会が多いのではないかと思われる。これらの生活の中の読み、書く活動にも今回の学習は役立つのではないかと考える。

次に本校研究課題「豊かな学びで個を育む～追究し発信する力の育成～」に沿って述べる。本校では「豊かな学び」を「個性を拓く学び」「社会につなぐ学び」「世界と結ぶ学び」の3つに視点をあてて考えている。今回の授業は他者の評価をいかしながら作文を作り上げることにより自己の表現力を高め自己の学びを深めていく「個性を拓く学び」と班内で円滑に活動できるよう考え周囲と協調しながら説明文を仕上げる「社会につなぐ学び」に視点をあてている。また、作文という形で他者に発信する力を育てたいと考える。

③ 学習の目標と評価規準

学習の目標 ＼ 評価規準	・説明文の組み立てを知る。 ・論理的な文章を書く。
関心・意欲・態度	・説明文の組み立てを知ろうとする。 ・論理的な文章を書こうとする。
書　く	・論理的な文章を書く。（2・3年ウ） ・他のグループの作品を読み、自己の表現を豊かにする。（オ）
読　む	・文章の構成や展開をとらえる。（ウ）
言語知識・理解	・段落の役割や文と文の接続関係を考える。（エ）

④　学習計画　全14時間（◎は本時で10時間目）

学習課程	学習の中心	教師の働きかけと学びのサイクル	観　点
組み立て説明書を書く （5時間）	・国旗を説明する	・国旗の説明を通して情報の文章化を経験させる。『習得』と『探究』	【関】 【書】
	・組み立て説明書を作成する	・文章化した情報を説明書とするための工夫を考えさせる。『習得』と『探究』	【関】 【書】
	・他のグループの説明書で実際に組み立ててみて説明書の問題点を考える	・よりわかりやすい説明とするために必要な事柄を考えさせる。『習得』と『探究』	【書】
説明文を読む （2時間）	・「植物のにおい」を読む	・説明文の構成に着目させる。『習得』	【読】 【言】
説明文を書く （5時間）	◎説明文を個人→班→個人で書く	・「説明文を読む」で学習した説明文の構成や書き方を応用させる。 ・班内で互いに添削させる。 ・自分の表現の参考となる他者の表現を見つけさせる。『習得』と『探究』	【書】
他者の説明文を読む （2時間）	・他の班の作文を読む	・他者の表現にふれて自分の表現を高めようとする意識を持たせる。『習得』	【書】

⑤　本時の目標

・各段落の書き方や細部の記述の仕方を知り、作文に応用することができる。（書くウ　2・3年）
・他者の作文を評価すること他者の評価を受けることを、自己の表現に役立てる。（書くオ）

⑥　本時の展開

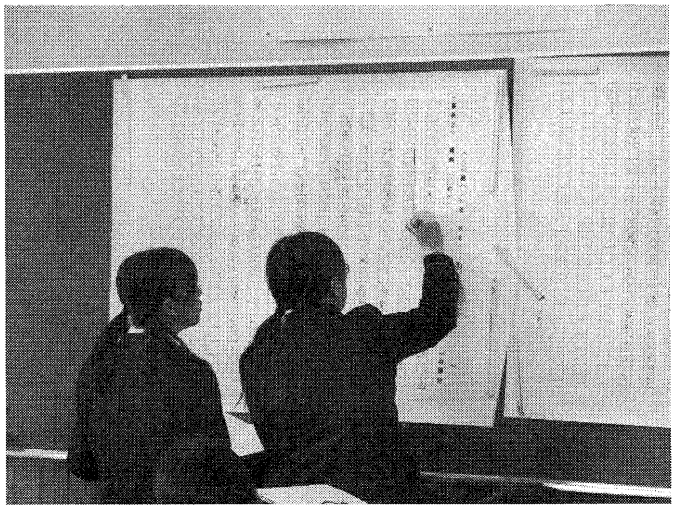
学　習　活　動	教師の支援	備　　考
・前時に書いた作文を互いに読み、添削する。	・よいと思う部分には赤で印を付けさせ、補足や訂正は青で書き込ませる。	・前時の作文 ・赤と青のボールペン
・推敲中の作文を実物投影機で写し、作文を書いた生徒と添削した生徒が説明する。 ・他班の作文も参考にしながら作文を推敲する。	・資料と作文のプリントを見ながら、聞かせる。	・実物投影機

資　料

・地球の温暖化のメカニズムと原因　（「手にとるように環境問題がわかる本」かんき出版より）
・地球の温暖化　異常気象との関係　（「手にとるように環境問題がわかる本」かんき出版より）
・海面水位の上昇　（「温暖化の世界地図」丸善より）
・危機にある都市　（「温暖化の世界地図」丸善より）

⑦　結果と考察

まず未知の国旗が描けるような説明書の作成を求めた。はじめは「国旗ぐらい」という班が大半であったが、他の班の説明書で実際に国旗を描き始めると与えられた文字情報を国旗という形にする難しさを実感したようであった。自分たちの班の説明書から正しい国旗が描かれるとたいそう喜び、また意図しない図柄の国旗が描かれるとその原因をクラス全体で考えることができた。次はびっくり箱や動く尺取り虫などの組み立て説明書を班で作り他の班が実際に組み立て、よかった点、問題点を考えた。生徒は、国旗をおもちゃの作り方をすでに知っている自分の目線で文章化しては他の人にはわかりづらいのだということを、適切な情報であってもその順番が大きな意味を持つことを肌で感じたようであった。そのうえで説明文を読んだのだが、整理された情報や抜け道の許さない論理の展開にふれて「ムダがないね」とつぶやいた生徒がいたことはうれしかった。実際に説明文を書く部分では環境問題を取り上げた。全員同じ限られた情報を持ちその範囲内で先に学習した説明文の構成で書くこと、対象は中学一年生であること、生活に多少の不便を感じることはあっても二酸化炭素を減らすために頑張らねばと思わせる文章にすること、そのために第一段落と第二段落の関わり方を工夫することを求めた。作文を書くときは楽しそうにしていたが、班内で他者の作文を読み始めると「同じ資料を読んでいるから言いたいことはわかるけれどこの書き方ではわからない。」や「これじゃ夏の暑い日にクーラーを我慢しようとは思えない。」「文が長すぎて初めと終わりで違う話になっている。」などの感想が出る反面、「そうか、こんなに書けばよかったのか。」や「僕の知らん漢字をつかってる。恥ずかし。」など、友達の作文を読むことによって自分ももっとできるはず、いやもっと頑張らなくてはという思いを持つ生徒も出てきた。中には「地球は今、えらいことになってんのやなぁ。」と作文の授業のねらいとは違うところに思いをはせる生徒もいた。



全体的に今までの学習の経験、さらに他者の作文の工夫された表現にふれているため、他の生徒の添削を受けても前向きに受け入れ自分の作文をよりよくしようという姿勢が見られた。清書の際には友達に「手を止めて悪いけど、もう一回作文見せてくれ。」と頼む生徒もあり、互いに作文を読み合うという学習形態は一応の成果を上げたのではないかと考える。ただ、作文を書く速度には個人差が大きく自分の作文を何度も読み直し推敲できた生徒がいた反面、書くのが精一杯で一度も読み返すことなく他者の評価を受けることになった生徒がクラスに１～２人いた。彼らが自分で読み直し推敲する時間を生み出す工夫が足りなかったことが反省される。

実践2　必修教科3年生

授業者　上　原　一　弥

① 題材　　詩に親しむ～中原中也を通して～

② 題材について

現在、様々な情報メディアが広まっている。例えば、その中でも携帯電話の普及は驚くべき速度で進んでいる。その携帯の普及により、携帯小説という新たなジャンルを生み出し、読むという点では従来の読み物に準じたスタイルとなってきつつある。

だが、これら情報ネットワーク上の文章と我々国語科の教師が扱う文章では大きな違いがある。それは、音読する機会の有無である。しかし、音読の重要性を生徒たちは実感しているだろうか？目で読むより、口で読む方がより理解できやすい。そんなことを知らない生徒の方が多いだろう。そこで実際に音読することで、文章構成で工夫された感情表現や修辞的な表現・慣用句表現などから感情表現を読みとらせ、音読の楽しさも発見させたい。そのために、私が選んだの教材は詩である。歌として身近に存在するので、親しみを持って取り組めること。また、短文でありながら読み込むことで感情表現を広げられることが詩を選んだ理由である。さらに、近代文学詩の中から中原中也を選んだのは、特異な擬音語表現に感情を込めた読みが多用に存在することと、中原中也の詩に存在するある種の闇の部分を感じさせたいからである。

続いて、以下に本校研究主題「豊かな学びで個を育む」および教科主題「豊かに生きる」に沿って授業の構想を述べる。

前述したとおり、詩を読むことへの興味・関心は生徒の心の中では取り立てて高いものではない。そんな中で詩へ音読の興味・関心を高めることで、音読をすることで新しい読みを見つける（個性を拓く学び）。また、授業内において互いの読みを発表・評価しあうことで、他者との違いを認め合う力がつく（社会につながる学び）。そして、日頃から様々な歌詞に親しんでいる自分たちに気づかせ、歌う行為が、音読する行為とつながっているのだと気付かせたい。自国の言葉で感情を込めて表現できることは、世界中の国々との文化の交流の中で、きっと日本の文化を伝える上でも役に立つからである。（世界と結ぶ学び）。

また、単に読むのではなく相手を意識した読みをしなければ、本授業は成立しない。発表を構成する話し手と聞き手を意識できる学習の場が必要なのだ。そこで、研究テーマの一つである協同学習にも必然生がでてくる。

本時間の学びのサイクルは、授業計画の位置としては詩の音読のための感覚を磨くための習得サイクルになる。ここで習得したことを次時以降で詩を深く音読しようとする探究サイクルへとつなぐのである。

③ 学習目標と評価規準

学習の目標 評価規準	・歌詞を中心とした詩に触れ、その詩に対する音読のイメージと実際に音読したイメージや曲との差を感じて、音読を学ぶ。 ・学んだ音読の表現方法を、中原中也の詩を中心に実践する。
関心・意欲・態度	・積極的に詩で学んだことを班で発表している。 ・詩を音読しようとしている。 ・学んだことをワークシートに書き込んでいる。
読むこと	・詩の意味を文章構成や言葉・表現などをとらえて、自分の表現に役立てている。イ
話すこと・聞くこと	・様々な音読（曲）を聞き、学んだ表現から、効果的な使い方や説得力ある表現方法を話したり聞き取る。ウ
言語事項	・文章表現や言葉・表現などから、語感を磨き語彙を豊かにする。（1）―エ

④　学習計画（単元構成表）全３時間（本時３／６）

学習課程	学習の中心	教師の働きかけと学びのサイクル	観 点
詩の世界観 （１時間）	・詩の世界に興味・関心を持つ。	・様々な詩を紹介したり、詩人の人生を教えることで、詩の世界に興味・関心を持たせる。『習得』	関心
音読の学習 （３時間）	・生徒が知らない歌詞を読ませ、音読したときのイメージを持たせる。 ・イメージと実際に音読した時や曲を聞いた時との差を感じ取らせる。	・音読のイメージは、できるだけ具体的に書かせる。（音楽的な用語や国語的な表現を多用して、より具体的に伝えるように気をつける）『習得』 ・班の中で発表させ、様々な感想を理解させるとともに、音読する上での表現の多様な性質に気付かせる。『探究』	読むイ 言(1)－エ 話・聞ウ
音読の実践 （２時間）	・中原中也を音読する。	・授業で得た言葉の表現方法を使い、音読表現を工夫する。『探究』 ・班で協力しあい、表現方法を高めていく。『探究』 ・各自の意志で（文章構成や慣用句を使った）工夫を凝らす。『探究』	言(1)－エ 話・聞ウ

⑤　本時の目標

・歌詞や詩を読み込み、音読する上で気になったことや読み方（メロディ）、感じ取ったことを互いに発表しあい、詩の世界になれ親しむ。

・微妙な歌い方やメロディをヒントに、言葉や表現の工夫からどう音読するのかを学ぶ。

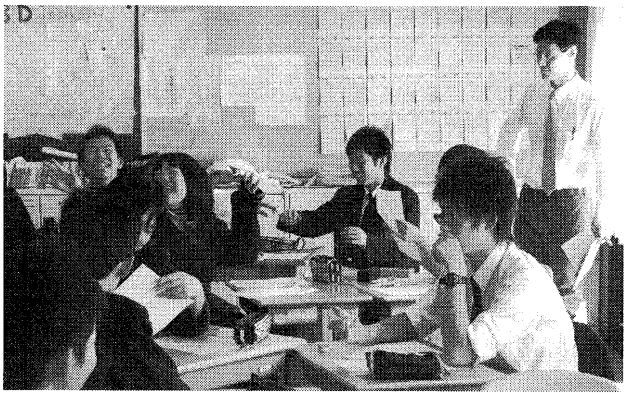
⑥　本時の展開

	学　習　活　動	教師の支援	備　　考
導入	・漢字テストを行う。 ・前時までを振り返る。 ・本時の目標を確認する。	・相互採点をきっちりと行わせる。 ・漢詩の世界観を思い出させる。 ・本時の目標はプリントする。	
展開	・生徒が知らない歌詞を提示し、音読の方法やメロディなど、音読する上で必要な背景を想像する。 ・班内で発表し合い、相互評価する。	・詩の背景や読みについて、できるだけくわしく想像させる。 ・気になった言葉や表現に着目させる。 ・班内の発表から、互いに新しい表現を発見させる。	ワークシート１（歌詞シート） ワークシート２ （書き込みシート）
まとめ	・本時の班発表で得た表現をまとめる。	・まとめをするときに、各自の視点で行わせる。	ワークシート３ （単元シート）

⑦　結果と考察

以前に「詩に親しむ」ことを優先して行ったことのある授業である。が、今回は『互いの意見を理解し合う』ことを第一に展開してみた。そのために主軸であった「歌詞を詩として読ませて、メロディを考えさせて書かせる」という点を少なくする代わりに、互いの考えを文字として書かせる場面を増やし、テー

マである『互いの意見を理解し合う』ことのできるように工夫した。具体的に言うと、ただ何となくいい詩だなぁではなく、修辞法や様々な言葉や表現に着目させて、そこから作者の思いを読み取ることを意識させた。その結果として、ワークシートに取り組むことで自分が何をしているのかがわかりやすく授業に集中しやすくなった。反面、作業さえこなせば授業をしたつもりになってしまうという面が見られた。関心・意欲ともとめている学力に整合性を持たせるように注意しなければならない。また、こちらも初めてではない分、以前の授業にとらわれてしまい「メロディを想起させる音楽的な授業」になりがちな場面もあったと反省している。



「個性を拓く」という点では、全体として各個人の考えを自分自身で確認する場面や発表する場面が多くとれたことが効果を発揮できたと思う。時代の新しい古いに関係なく歌詞を使用すると興味や関心は向上する。（授業では意図的に最近の曲を避け、昭和初期のＣＭソングやフォークソングを中心に添えた。）おかげで、授業への集中力は飛躍的に向上させることが出来たといえる。さらに、聞き慣れない曲への他の人の考えにも興味を高く持つことができ、一石二鳥の面もある。しかし、メロディに気持ちを引っ張られてしまい音楽的な授業になりはしまいかということが、国語の授業として心配な部分であり、横断的・総合的な授業時では成果の上がりやすい点であろう。生徒自身の感想にも、「楽しい詩の授業だった」「また、したい」などの意見が大半を占めていたが、中に「音楽の授業みたいで楽しかった」という意見があり、やはりこれがこの授業の課題であると言える。

「社会につなぐ」という点では、他の人の意見を聞く機会が増えたことは評価できることだと思う。課題になるのは、その意見が国語の教材であるかどうかである。音楽的な感覚を言葉で表現するのも国語であるかもしれない。しかし、国語の授業である以上はある感情や考えを表すのにどのような表現の工夫がされているのかを読み取らせなければならないし、それを中心に添えなければならないだろう。興味や関心をひくために、教材で取り上げている「専門的な部分（歴史的・地理的・音楽的・美術的）」をどれくらいアピールするのかが課題となるだろう。そうすることで、より国語的な意見を交換し合えるのではないだろうか。

「世界と結ぶ」という点の成果については、とても見えにくい授業となってしまった。詩を感情を込めて読む……即ち朗読するという行為にえらく時間がかかってしまったからだ。詩を選び、そこから感じたことを言葉にし、どんな感情を伝えたいのかを考え、どう伝えたいのかを工夫させ、それを文字化させ、練習させ、発表させる。これを今回は個人個人で行ったわけである。それなりの結果は残せただろう。しかし、授業時間では収まらず、休憩時間やお昼休み・放課後も行わなければならなかった。その点は今後大きく改善する必要がある。また、一番の発表所を他の生徒に聴いてもらえないことも課題である。今後は、発表することよりもそれを聞くことにより自分の学習に反映させることを大きな課題としていく必要があるだろう。